

# A C E REVIEW

the Activity Center for English

# 2020



英語教育センター

(Activity Center for English)

**2020 Volume 2**

ISSN 2434-8406

## ACE COMMITTEE MEMBERS 2020

### センター長

村尾敏彦 (人間社会学部)

Toshihiko Murao (Faculty of Human & Social Sciences)

### 文学部

(Faculty of Literature)

今井澄子

*Sumiko Imai*

### 教育学部

(Faculty of Education)

小倉雅明

*Masaaki Ogura*

小山敏子

*Toshiko Koyama*

ベー・シウキー

*Siewkee Beh*

### 人間社会学部

(Faculty of Human & Social Sciences)

ランカシャー・テレンス

*Terence A. Lancashire*

### 薬学部

(Faculty of Pharmacy)

森本正太郎

*Shotaro Morimoto*

### 英語教育センター

(Activity Center for English)

アラオ・アーノルド

*Arnold F. Arao*

荒川亜希

*Aki Arakawa*

多井中知子

*Tomoko Tainaka*

## はじめに一現状と今後

### 1. ACE の現状と今後

英語教育センター（ACE）のレポート Ace Review の第 1 回目は ACE 設立の 2017 年度とそれに続く 2018 年度の 2 年間の活動報告であった。今回は第 2 回目として、2019 年度および 2020 年度の活動報告となる。

この活動報告は歩きながら周囲を見回して語るという感覚がある。つまり、自分自身の歩きぶりを客観的に理解する視点をもてない不安がつきまとう。おそらくは、社会の中心からも周辺からも聞こえてくる遠雷のような響きが、いったい何の予兆なのかははっきりしないまま生きている私たちの不安と繋がるように思われる。

#### 1.1 2019 年度

ACE が 2017 年度に設立されて以降、自らの課題を果たすことによって、大学でその存在を認知されるようになった。3 年目の 2019 年度は、それ以前の 2 年間の活動を継続していった。

#### 1.2 2020 年度

新型コロナウイルスの感染拡大の状況下において、前年度までのような対面授業ができなくなり、学年歴よりもおよそ 2 週間遅れで、オンライン方式の 2020 年度前期授業が始まることとなった。共通教育科目の 1 年次開講科目「英語 IA（コミュニケーション）」・「英語 IB（コミュニケーション）」（以下、英語 IA/IB）と 2 年次開講科目「英語 IIA」・「英語 IIB」（以下、英語 IIA/IIB）の授業についても、前期中は対面授業を行うことはできなかった。多くのオンデマンド方式で tani-Wa（授業支援システム manaba の本学での通称）を活用し、パワーポイントに音声を入れた動画の配信で、少数の授業は同時双方向方式（ZOOM などを活用）で行われた。後期になると大学の新たな方針が提示され、コロナ感染防止の工夫を行うという条件付きで対面授業が許可された。過半数の担当教員は同時双方向方式を選択肢し、次に対面式、さらにわずかながらオンデマンドの授業もあった。

前期においては、教職員も学生も突然の変化に容易に対応できず、混乱があった。たとえば、学生が教科書を入手するのに時間がかかることになった。前年度までなら、学生は WEB で指定の業者に注文し、授業が始まる時期には大学で受け取ることができたが、2020 年度は前期授業が始まったのに、まだ学生たちは教科書を持っていない状態だった。共通教育科目の英語では、どの授業でも教科書を使用する予定であったため、学生自身はもちろん、授業担当教員も当惑し対応に追われた。

2020 年度に共通教育科目の英語を担当した教員すべてを対象に、2021 年 1 月にアンケート調査を行った。前期そして後期の授業実施はどのような状況であったかについて記入

していただいた。このアンケートの集計をとおして、コロナ禍での共通教育科目の英語の授業実施が被った困難とそれへの対応状況を把握することにしよう。

まず前期にオンデマンドで授業を行った教員の声を傾聴する。授業運営については、「語学の演習授業であるのに生の音声でのやりとりができなかった」、「学生の反応がすぐにはわからず不安がともなった」という指摘があった。授業媒体についての指摘は、「教員自身がネット環境に疎く不慣れなため、学生が提出した課題をチェックし管理し返却する作業がうまくいかなかった」、「授業準備にひどく時間がかかった」、とのことである。良かった点については、「対面よりも丁寧な授業ができた」、「学生は何度も繰り返し動画を見ることができ、対面授業では質問しなかった学生が個別に質問した」、「予習教材とフォローアップ教材を配信することで学生の授業理解が進んだ」、などの意見があった。

後期に対面授業を行った教員からは、「受講する学生が理解していくようすを目にすることができた」との意見があった。しかし、「適切な距離を保ちながら英語でコミュニケーションを行うことに気をつけなければならなかった」、「感染拡大防止のため学生に口頭発表や音声練習を制限しなければならなかった」とも語っている。さらに、「12月にコロナ感染者が増えると、履修学生から前期のようなオンデマンド方式での授業実施を望む声が上がった」という指摘もあった。

後期に同時双方向授業を行った教員は、「チャットを使って簡単な反応を学生から引き出した」、「学生とその場でのやりとりをして問題解決ができた」という肯定的な意見もあった。しかし、問題点としては、「学生が顔出ししないため声の調子から理解できているかどうかの判断をしなければならなくてもどかしかった」、「大学での対面授業に出席するために通学途中で ZOOM に参加している学生が授業途中で ZOOM から脱落してもう一度入り直したり、通学中で声を出せないでいた」という指摘があった。

後期は対面授業と同時双方向授業が混在していたため、学生はあわただしい受講状況にあった。対面授業のあとすぐに同時双方向授業に参加するときには、自宅の PC を使わず、大学内の Wi-Fi 使用可能な場所に移動してスマホで授業に参加すると、周囲に同様な学生たちが集まっていて、声を出して授業に参加することが困難な場合もあった。

以上の記述からわかるように、コロナ禍においては、わたしたちは異なる種類の授業方式を試したのだが、どれを選択しようと何らかの問題が生じ、それぞれに難しい対応を迫られた。いまだに正解を見出せないままである。

コロナ禍の状況の特徴のひとつは、それ以前においても存在していたのにそれほど顕在化していなかった問題点が、わたしたちの目の前に大きな姿を現すことである。本学において前景化した問題点のひとつは、ICT の普及がまだ十分ではないということである。スマホはもっていてもパソコンをもっていない、あるいは自宅の通信環境が悪くて同時双方向授業に参加できない、といった学生もいた。これに対して、大学は情報通信系教室のパソコンを利用できるように準備し、大学の Wi-Fi 設備を強化した。

コロナ禍の状況の特徴をもうひとつ挙げると、コロナ禍以前では当然のごとくに行われていた日常的行為、ルーティン化された行為を断念しなければならなくなるため、当然という外皮をはぎ取られ、これまでの行為をふりかえり考察し、より普遍的な思考が生まれることである。教員からのアンケートのなかに、そうした考察を見出すことができる。まず、「学生が適切なペースで定期的に学習を進められるような仕組づくりが必要である」という指摘があった。コロナ禍でのイレギュラーな状況の中で、学生は自宅にこもって生活のリズムが壊れがちであった。そうした事態からのふりかえりであるが、コロナ禍以降においても大切な課題の指摘であろう。

さらに、別な教員の指摘をここに挙げる。「前期にオンデマンド方式であったさいに、毎回の授業で予習用教材と復習用のフォローアップ教材を配信していたが、後期の対面授業に切り替えたあとも、同様に教材配信する中で、授業内容を受講生がより深く理解するためには、対面授業とオンデマンド教材の併用が有効であることがわかった」という意見である。今後の授業実施の方法についての貴重な指摘だが、こうした英語の「授業準備にあまりに多くの時間と労力が必要である」ことを、同じ教員が問題点として指摘しておられる。

### 1.3 今後に向けて

2021年度においてもコロナ感染が続く中での授業実施となる。共通教育科目の英語については原則として対面の授業になる予定であるが、2020年度での経験を踏まえて、その運営を考えなければならない。

コロナ感染者が急増して緊急事態宣言が発せられ、大学に通学し対面授業に参加することを不安に思い、オンライン授業を希望する学生が現れた場合には、問題解決が容易でないことが予想される。ハイフレックス方式で対面と同時双方向が併用できるような Wi-Fi 設備が整っていない教室が多いため、授業支援システム tani-Wa の活用などの工夫によって、学生に対して学習の場を保障することになる。

中期的な展望としては、学生の英語力の向上、とりわけ TOEIC®の得点を高めることを、自己点検評価委員会「アクション・プラン 2025」の「グローバル人材を育成するために英語教育の充実を図る」という方針の目標のひとつとしている。本学においては、学生の英語学習への意欲や動機付けが弱い場合が比較的多い。そのため、TOEIC®受験者も少ない。正課の TOEIC®関連の授業科目はすでにあるが、まず、TOEIC®についての正確な情報提供を強化し、TOEIC®受験者を増やすことから始める。さらに、自学自習に e-Learning (TOEIC®に特化したものもある) を長時間にわたって活用するように学生に促していく。

学生へ支援としては、正課の英語教育の充実、学習支援室との連携、正課外の ACE プログラムによる学習共同体の形成だけでなく、本学のように英語学習への動機が希薄な学生が多い場合は、海外への関心をもつ学生に対する働きかけが必要であろう。そこで本学の国際交流室との連携が重要になる。たとえば国際交流室が実施する 3 週間にわたる夏季のカ

ナダ語学研修と春季のニュージーランド語学研修への参加者を、帰国後 ACE プログラムへと繋いで英語学習を継続できるような働きかけが大切になる。それだけでなく、国際交流室と英語教育センターが、英語に興味をもつ学生についての情報を共有し、学生に互いの企画を紹介し合えるようになることで、英語の学びをさらに活性化することができるであろう。現在は、国際交流室は 1 号館 2 階に、英語教育センターが隣接する志学館の 5 階にあり隔たりは大きい。将来的にそれぞれの部署の職員が容易に声を掛け合えるような近距離に位置させて、学生についての情報をやりとりできることが望ましいであろう。国際交流室が企画実施している多様な異文化体験によって世界像を更新し広げていく過程と結びつくことで、学生の英語力はさらに向上するであろう。

## 共通教育科目「英語 IA/IB」「英語 IIA/IIB」

### 1. 共通シラバス

2017 年度の ACE 設立以来、本学の共通教育外国語科目のうちもっとも履修者が多い英語 IA/IB、英語 IIA/IIB の「授業テーマ」「到達目標」「評価方法」など 5 項目を統一した共通シラバスを設定し、大学生として望ましい英語力の育成を目指してきた。

#### 1.1 2019 年度

2019 年度は、文部科学省からの指針や本学教務委員会からの方針を受け、2020 年度の授業に向けて英語 IA/IB、英語 IIA/IIB のシラバス内容を表 1、表 2 の通り改定した。

表 1. 英語 IA/IB（コミュニケーション）シラバス統一項目

授業テーマ	英語コミュニケーション能力の育成
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・コミュニケーションの基礎となる英文法が説明できる（Grammar）。</li> <li>・比較的容易な英語で書かれたテキストを正確に理解できる（Reading）。</li> <li>・英語での平易な日常会話を聞き取ることができる（Listening）。</li> <li>・基本的な語句や表現を使って英語で発信できる（Writing）。</li> </ul>
評価方法	複数回の復習テストにより確認された授業内容の理解度（50%） 平常点（毎回実施するクイズの正答率、課題提出状況とその内容、授業内での発表内容）（40%） e-Learning プログラムに設定された課題達成度（10%）
フィードバックの方法	復習テストやクイズ実施時は、必ず解説などのフィードバックを行う。また、提出物は授業内で返却して説明する。授業中、及びふりかえりシート等に記載された質問については、次回の授業時に回答する。
評価基準	以下の基準で評価を行う。 (1) 英文法の知識 <ul style="list-style-type: none"> <li>・可：テキスト内の文法に関連した練習問題を解くことができる。</li> <li>・秀：テキスト内の文法に関連した練習問題が正確に解答でき、その内容を説明できる。</li> </ul> (2) 英文読解の知識 <ul style="list-style-type: none"> <li>・可：テキスト内の英文の概要を把握できている。</li> <li>・秀：テキスト内の英文の内容を正確に理解し説明できる。</li> </ul> (3) 英語の聴解力 <ul style="list-style-type: none"> <li>・可：テキスト内の英文や日常会話の概要を聞き取ることができる。</li> <li>・秀：テキスト内の英文や日常会話を正確に聞き取り説明できる。</li> </ul> (4) 英語の発信力 <ul style="list-style-type: none"> <li>・可：テキストに使用されている語句や表現を使って、簡単な英文を作ることができる。</li> <li>・秀：テキストに使用されている語句や表現を使って、英語で自分の意見を発信できる。</li> </ul>

表 2. 英語 IIA/IIB シラバス統一項目

授業テーマ	英語コミュニケーション能力の発展
到達目標	コ英語IA・IBで培った基礎的コミュニケーション力をもとに、アカデミック、または専門分野に関する指定のトピックについてのまとまった英文を文法の知識（Grammar）をもとに正確に理解でき（Reading, Listening）、そこで学んだ語句や表現を使って英語で発信できること（Writing）を目標とする。
評価方法	複数回の復習テストにより確認された授業内容の理解度（50%） 平常点（毎回実施するクイズの正答率、課題提出状況とその内容、授業内での発表内容）（40%） e-Learningプログラムに設定された課題達成度（10%）
フィードバックの方法	復習テストやクイズ実施時は、必ず解説などのフィードバックを行う。また、提出物は授業内で返却して説明する。授業中、及びふりかえりシート等に記載された質問については、次の授業時に回答する。
評価基準	以下の基準で評価を行う。 (1) 英文法の知識 ・可：テキスト内の文法に関連した練習問題を解くことができる。 ・秀：テキスト内の文法に関連した練習問題が正確に解答でき、その内容を説明できる。 (2) 英文読解の知識 ・可：テキスト内の英文の概要を把握できている。 ・秀：テキスト内の英文の内容を正確に理解し説明できる。 (3) 英語の聴解力 ・可：テキスト内の英文や日常会話の概要を聞き取ることができる。 ・秀：テキスト内の英文や日常会話を正確に聞き取り説明できる。 (4) 英語の発信力 ・可：テキストに使用されている語句や表現を使って、簡単な英文を作ることができる。 ・秀：テキストに使用されている語句や表現を使って、英語で自分の意見を発信できる。

英語 IA/IB、英語 IIA/IIB とともに、今回行った改定は次の 2 点である。まず「到達目標」から英語のコミュニケーション力のうち Productive 能力の Speaking を削除し、Writing のみとしたことである。この理由として、授業運営の実態に合わせた活動内容とすることがあげられる。本学における共通教育外国語科目のクラス定員は 35 名であり、学生同士のペアやグループワークでの Speaking 活動は可能であるものの、30 名を超えたクラスサイズでは授業担当教員と学生との Interactive な活動は困難である。実際、本学の共通教育外国語科目カリキュラムでは、2 年次に Speaking 力の強化を目的とした「英会話 A/B」が設置され、自由に履修できる環境が学生に提供されているため、在学中に英語 4 技能の学力向上を目指すことができる。

次に、「評価基準」を「到達目標」に合わせ、英文法、英文読解、英語聴解力、英語発信力の 4 つの項目において、「単位認定に必要な最低限の基準」と「最も望ましい基準」を明確にした。



## 1.2. 2020 年度

2020 年度当初から、コロナ禍による混乱で多様な授業形態を余儀なくされる中、英語科目担当教員それぞれが予定されていたシラバス内容に沿った授業運営に尽力された。

## 1.3 今後に向けて

2021 年度もコロナ禍の収束による従来の授業運営には完全に返ることが見通せないため、2021 年度のシラバスの共通項目については 2020 年度の内容を継続することとした。

今後は、「評価方法」の内容についても、さらに具体的な活動内容を明記するなど、学生にとって授業内容が具体的でわかりやすい表記を行い、全学的な学生の英語力向上を目指した取り組みを行っていく。

## 2. 習熟度別クラスの設置

本学の英語 IA/IB クラスは 2018 年度から習熟度別クラス編成を導入している。また、2019 年度からは英語 IIA/IIB クラスにも設置することとした。クラス編成を行うにあたり、その根拠となる英語力の客観的な資料については導入当時から英語運用能力評価協会 (ELPA) のテストを継続して利用している。

成績評価については、標準クラス、基礎クラスそれぞれの秀・優の割合を決め、授業担当教員に依頼している。これは、上位クラスに配属された学生にとって、下位クラスに配属された学生と比較して、成績評価が不公平にならないためである。

### 2.1. 2019 年度

習熟度別でクラスを分ける目的は、教員に対しては学力差の少ないクラスで効率的な授業運営を可能にすることであり、学生に対しては自身の英語力に応じた学習環境で学ぶことである。それが実現しているかどうかを検証するために、2018 年度末と 2019 年度末に英語授業担当教員を対象にアンケートを実施した。アンケートの内容は 1) 従来の学籍番号で編成されたクラスと比べて、授業運営についてどう変わったか、2) 成績評価基準のクラス別の比率は適切であるか、の 2 点で記述式回答とした。

1) のクラス編成に関しては、回答のあった 13 教員の内、6 教員から「レベルが揃っている、授業運営がしやすい」といった肯定的な意見が出ており、習熟度別クラス編成による一定の効果を感じた。しかし、3 教員は「未だクラス内のレベルに差がある」と感じているようであった。また、2018 年度のアンケートにはなかった回答が 2019 年度には見られた。それは基礎クラスに配属した履修学生の英語学習に対するモチベーションの低さである。2 教員がこれを理由に授業運営の困難さを感じているようであった。

2) の成績評価基準については、規定の秀・優の割合に収めることの困難さを指摘する回答があった。その一方で「バラツキのある結果を出すには工夫が必要」、「習熟度別クラス編

成をしている以上、同じ比率というわけにはいかない」など、一定の理解を示す回答も見られた。

## 2.2. 2020 年度

これまでと同様、英語 IA/IB、英語 IIA/IIB クラスで習熟度別クラス編成を行った。成績評価についても同様の基準を設定し、授業担当教員に依頼した。

## 2.3. 今後に向けて

アンケートの回答により、学生の習熟度に分かれたクラス編成が実現できているようである。しかし、学科ごとに英語力のレベルの差が大きく、基礎クラスに属するクラス同士にもレベルの差異が大きい場合があり、クラス分け作業に改善の余地が見られる。また、成績評価基準については、今後も授業担当教員の意見を聴取して、現状を把握し、秀・優の割合を見直すことも検討していく。

## 3. プレイスメントテストとアチーブメントテスト

### 3.1. 2019 年度

プレイスメントテストとアチーブメントテストは 2018 年度に実施して依頼、継続して英語運用能力評価協会（ELPA）を利用している。2019 年度は 2018 年度と同様、入学式翌日の 2019 年 4 月 3 日（水）に実施した。会場設営は教務課の補助を得て行い、新入生が混乱しないよう、入学式後の事務連絡の際に試験教室・実施時間などを各学科から周知してもらうよう依頼した。試験当日は ACE 運営委員が監督責任者を担当し、各学科の教職員が補助監督ならびに配布回収補助を担当した。このように各学科の協力を得ることができたため、新入生 683 名のうち、669 名（98.0%）が受験することとなった（表 3）。このテスト結果をもとに、英語 IA/IB クラスの習熟度別クラス編成を行った。

アチーブメントテストは 1 回生だけでなく、2 回生も実施することとした。これは英語 IIA/IIB クラスの一年間の英語学習成果を測ることを目的としているが、加えて、2019 年度 2 回生は 2018 年度 4 月にプレイスメントテストを受験しているのも、学生にとっては 2 年間の英語学習状況の履歴・学修成果の蓄積となることも理由である。試験実施にあたっては、プレイスメントテストと同様、実施時間の調整や実施要員・教室の確保など、教務課及び各学科の協力を得て実施することができた。また、周知方法としては、掲示や会議に加えて、英語授業担当教員からクラスの受講生に伝達してもらうよう依頼した。

表 3. 2019 年度プレイスメントテストの受験状況

学部・学科 (在籍者数)	受験者数 (人)	欠席者数 (人)	2019年度 英語I履修者数	受験率 (%)
日本語日本文学科 (60名)	60	0	52	100.0%
歴史文化学科 (57名)	56	1	48	98.2%
教育学部 (235名)	231	4	234	98.3%
－幼児教育専攻 (104名)	104	0	104	100.0%
－学校教育専攻 (94名)	91	3	94	96.8%
－特別支援教育専攻 (37名)	36	1	36	97.3%
人間社会学科 (93名)	91	2	93	97.8%
スポーツ健康学科 (104名)	103	1	104	99.0%
薬学部 133名 <sup>※1</sup> +1名 <sup>※2</sup>	128	6	133	95.5%
合計 683名	669	14	664	98.0%

※1 薬学部留年生除く

※2 入学前単位認定者

後期 16 週目にあたる 2020 年 1 月 22 日 (水) 2 限目に 1 回生対象アチーブメントテスト、3 限目に 2 回生対象アチーブメントテストを実施した。後日実施した追試験の受験者を含め、受験状況は表 4 の通りである。1 回生については 669 名中 618 名 (92.4%) が受験し、テスト結果から、英語 IIA/IIB のクラス分けを行った。2 回生は 673 名中 479 名 (71.2%) と、ある程度予想通り受験率が下がった。2 回生は 1 回生とは異なり、テストの結果を次年度のクラス分けに利用することがないため、受験に対する意欲が下がったと思われる。

両テストは実施の際に、配慮を必要とする学生についての対応も行っている。学生本人とアクセスルームによる事前相談の内容を踏まえ、個別対応を行った。2019 年度はプレイスメントテスト時において、配慮を必要とする学生の要望はなかったが、アチーブメントテスト時においては、人間社会学部 1 回生 1 名、人間社会学部 2 回生と薬学部 2 回生の各 1 名について、別室受験にて対応した (人間社会学部 1 回生、2 回生は当日欠席)。

表 4. 2019 年度アチーブメントテストの受験状況 (1 回生・2 回生)

2020/01/22本試験実施

2020/02/07追試験実施

学部・学科 在籍者数【1回生】	受験者数 (名)	欠席者数 (名)	2019年度英語I 履修者数(名)	受験率 (%)
日本語日本文学科 59名	56	3	51	94.9%
歴史文化学科 56名	49	7	47	87.5%
教育学部 233名	220	13	233	94.4%
－幼児教育専攻 103名	99	4	102	96.1%
－学校教育専攻 94名	86	8	94	91.5%
－特別支援教育専攻 36名	35	1	36	97.2%
人間社会学科 91名	81	10	91	89.0%
スポーツ健康学科 100名	96	4	100	96.0%
薬学部 129名 <sup>※1</sup> +1名 <sup>※2</sup>	116	14	133	89.9%
合計 669名	618	51	654	92.4%

学部・学科 在籍者数【2回生】	受験者数 (名)	欠席者数 (名)	2019年度英語II 履修者数(名)	受験率 (%)
日本語日本文学科 51名	20	31	42	39.2%
歴史文化学科 56名	22	34	43	39.3%
教育学部 247名	193	54	234	78.1%
－幼児教育専攻 126名	95	31	116	75.4%
－学校教育専攻 88名	65	23	85	73.9%
－特別支援教育専攻 33名	33	0	33	100.0%
人間社会学科 78名	66	12	64	84.6%
スポーツ健康学科 108名	72	36	85	66.7%
薬学部 133名 <sup>※1</sup>	106	27	123	79.7%
合計 673名	479	194	591	71.2%

※1 薬学部留年生除く ※2 入学前単位認定者

表 5. 2019 年度プレイスメントテストの学科・専攻別結果

2019/04/03実施

	受験者数 (0内は欠席者数)	英語 履修者数	平均点		最高点 (300点)	最低点	標準偏差	
			全体	英語 履修者			全体	英語 履修者
全体 683名	669名 (14名)	664名	148.0	148.4	254.0	43.0	32.7	32.5
文学部 117名	116名 (1名)	100名	146.7	149.5	236.0	52.0	34.1	33.8
- 日文	60名	52名	153.7	155.2	236.0	94.0	31.0	31.5
- 歴史	56名 (1名)	48名	139.2	143.3	219.0	52.0	36.0	35.5
教育学部 235名	231名 (4名)	234名	152.0	151.7	236.0	83.0	30.1	29.7
- 幼教	104名	104名	140.4	140.4	200.0	83.0	27.4	27.4
- 学教	91名 (3名)	94名	163.1	163.1	236.0	106.0	29.0	29.0
- 特支	36名 (1名)	36名	157.7	155.8	231.0	109.0	28.5	26.5
人間社会学部 197名	194名 (3名)	196名	136.1	136.1	254.0	43.0	31.9	31.9
- 人社	91名 (2名)	93名	142.0	142.0	254.0	43.0	35.0	35.0
- スポ	103名 (1名)	104名	130.8	130.8	232.0	75.0	28.0	28.0
薬学部 133名 <sup>※1</sup> +1名 <sup>※2</sup>	128名	133	159.8	159.8	231.0	96.0	31.5	31.5

※1 薬学部留年生除く  
 ※2 入学前単位認定者

表 6. 2019 年度アチーブメントテストの学科専攻別結果 (1 回生)

2020/01/22本試験実施  
2020/02/07追試験実施

【1回生】

	受験者数 (0内は欠席者数)	英語 履修者数	平均点		最高点 (300点)	最低点	標準偏差	
			全体	英語 履修者			全体	英語 履修者
全体 669名	618名 (51名)	650名	143.7	144.2	260.0	51.0	35.0	35.0
文学部 115名	105名 (10名)	98名	142.7	145.1	221.0	67.0	34.1	34.4
- 日文	56名 (3名)	51名	147.1	146.9	221.0	67.0	34.2	35.3
- 歴史	49名 (7名)	47名	137.7	142.8	220.0	81.0	33.4	33.5
教育学部 233名	220名 (13名)	233名	151.5	151.5	260.0	84.0	33.0	33.0
- 幼教	99名 (4名)	102名	138.1	138.1	227.0	84.0	29.8	29.8
- 学教	86名 (8名)	94名	164.6	164.6	260.0	96.0	32.7	32.7
- 特支	35名 (1名)	36名	157.3	157.3	198.0	91.0	27.5	27.5
人間社会学部 191名	177名 (14名)	191名	131.7	131.7	234.0	60.0	33.3	33.3
- 人社	81名 (10名)	90名	140.2	140.2	234.0	70.0	34.0	34.0
- スポ	96名 (4名)	100名	124.6	124.6	224.0	60.0	30.9	30.9
薬学部 129名 <sup>※1</sup> +1名 <sup>※2</sup>	116名 (14名)	129名	148.2	148.5	239.0	51.0	36.5	36.7

※1 薬学部留年生除く  
 ※2 入学前単位認定者

表 7. 2019 年度アチーブメントテストの学科専攻別結果 (2 回生)

2020/01/22本試験実施  
2020/02/07追試験実施

【2回生】

	受験者数 (0内は欠席者数)	英語 履修者数	平均点		最高点 (300点)	最低点	標準偏差	
			全体	英語 履修者			全体	英語 履修者
全体 673名	479名	591名	145.5	147.9	270.0	29.0	36.8	36.5
文学部 107名	42名 (65名)	85名	149.3	152.9	235.0	46.0	36.5	34.5
- 日文	20名 (31名)	42名	146.0	151.2	221.0	46.0	36.4	29.8
- 歴文	22名 (34名)	43名	152.4	154.6	235.0	99.0	36.4	39.4
教育学部 247名	193名 (54名)	234名	156.7	157.1	270.0	41.0	37.5	33.6
- 幼教	95名 (31名)	116名	144.9	145.2	236.0	41.0	33.2	38.9
- 学教	65名 (23名)	85名	175.5	176.1	270.0	100.0	38.6	39.1
- 特支	33名	33名	153.7	153.7	246.0	91.0	32.0	32.0
人間社会学部 186名	138名 (48名)	149名	124.4	127.1	215.0	29.0	28.9	29.3
- 人社	66名 (12名)	64名	129.7	131.3	215.0	79.0	28.7	29.3
- スポ	72名 (36名)	85名	119.6	123.1	192.0	29.0	28.3	29.0
薬学部 133名 <sup>※</sup>	106名 (27名)	123名	151.1	152.2	256.0	65.0	33.2	33.2

※薬学部留年生除く

2019 年度 1 回生の両テスト結果を表 5・表 6 に、2 回生対象のアチーブメントテスト結果を表 7 にまとめた。2019 年度 2 回生アチーブメントテストの受験者は、1 年前の 2018 年度入学式の翌日にプレースメントテストを受験し、後期第 16 週目にはアチーブメントテストを受験している。試験結果の全体平均点（英語履修者）を比較してみると、2018 年度プレースメントテストでは 146.6 点、同年度アチーブメントテストでは 147.8 点、そして 2019 年度のアチーブメントテストでは表 7 の通り 147.9 点である。一定数の学生について、英語力が入試の時点で最も高くその後は下降する傾向がある。週 1 回の英語の授業に関連してしか英語学習を行わないためである。しかし、2018 年度入学生について、わずかながらだが平均点が上昇し続けたことは喜ばしいことであろう。とはいえ、2019 年度アチーブメントテストの受験率が 71.2% と低いため、確実な推論とは言えない。

### 3.2. 2020 年度

これまで、両テストは英語運用能力評価協会（ELPA）の「標準-短縮版（45分）」を利用してきた。短縮版としているのは、入学式後から履修登録までのオリエンテーション期間の、限られた時間内で試験を実施する必要があったためである。しかし、短縮版を利用している大学は本学のみであるため、比較データが少ないことが難点であった。2020 年度は「標準版（60分）」を利用できる時間枠を確保することができたので、2020 年度からの両テストは「標準版（60分）」とすることとした。

コロナ禍の影響で、4月初旬は前期授業の見通しが立たず、新入生には不安が広がっていたことが想像される。しかし、2020 年度プレイスメントテストは2020年4月3日（金）に対面形式で実施することができた。コロナウイルス感染拡大防止に努めるため、午前と午後に受験者を分けることや、手指消毒・教室の換気などを徹底し、これまで培ってきた手順をもとに、教務課と各学科との協力を得て実施した。2020 年度プレイスメントテストは表 8 の通り、新入生 693 名中、682 名（98.4%）が受験し、テスト結果から英語 IA/IB の習熟度別クラス編成を行った。

表 8. 2020 年度プレイスメントテストの受験状況

2020/04/03実施			
学部・学科 (在籍者数)	受験者数(人)	欠席者数(人)	受験率(%)
日言語日本文学科 (58名)	58	0	100.0%
歴史文化学科 (56名)	55	1	98.2%
教育学部 (236名)	234	2	99.2%
－幼児教育専攻 (112名)	112	0	100.0%
－学校教育専攻 (89名)	88	1	98.9%
－特別支援教育専攻 (35名)	34	1	97.1%
人間社会学科 (89名)	88	1	98.9%
スポーツ健康学科 (110名)	107	3	97.3%
薬学部※ (144名)	140	4	97.2%
合計 693名	682	11	98.4%

※薬学部留年生除く

アチーブメントテストの実施時期は例年通り、後期 16 週目にあたる 2021 年 1 月 20 日（水）とした。実施にあたり、午前と午後に受験者を分けるなど、コロナウィルス感染拡大防止に努めた。しかし、試験の場合どうしても多くの学生が集中することから、不安に感じている学生がいることも予想されたので、相談窓口として英語教育センター事務が電話やメールで対応するとしたところ、30 名程度の学生からの問い合わせがあった。

試験の周知もこれまで通り、掲示・会議・英語授業担当教員による案内、学内ポータルによる配信を行った。加えて、本試験に欠席した学生を担当ゼミ教員がフォローするといった一部学科の協力もあり、追試験の受験者も含めて、1 回生 675 名中 599 名（88.7%）が受験することとなった（表 9）。なお、2019 年度は 1・2 回生を対象にアチーブメントテストを実施したが、2020 年度は 2 回生対象のテストを中止とした。2019 年度 2 回生の受験率が低かったこと、加えてコロナ禍の状況で 1 回生・2 回生ともに実施することが困難であったためである。

配慮を必要とする学生について、2020 年度はプレイスメントテスト時において、教育学部 2 名に対して口達等の紙面提示とスクリプトを用いたリスニング試験を実施した（内 1 名は当日欠席）。アチーブメントテスト時においても同様の対応を行った。

表 9. 2020 年度アチーブメントテストの受験状況

2021/01/20本試験実施  
2021/02/05追試験実施

学部・学科 在籍者数	受験者数 (名)	欠席者数 (名)	受験率 (%)
日文語日本文学科 57名	56	1	98.2%
歴史文化学科 56名	49	7	87.5%
教育学部 234名	205	29	87.6%
－幼児教育専攻 111名	97	14	87.4%
－学校教育専攻 89名	76	13	85.4%
－特別支援教育専攻 34名	32	2	94.1%
人間社会学科 87名	77	10	88.5%
スポーツ健康学科 108名	93	15	86.1%
薬学部※ 133名	119	14	89.5%
合計 675名	599	76	88.7%

※薬学部留年生除く



表 10. 2020 年度プレイスメントテストの学科・専攻別結果

2020/04/03実施

	受験者数 ( )内は欠席者数	英語 履修者数	平均点		最高点 (300点)	最低点	標準偏差	
			全体	英語 履修者			全体	英語 履修者
全体 693名	682名	670名	152.6	153.8	280.0	59.0	34.2	33.5
文学部 114名	113名 (1名)	105名	155.8	156.9	241.0	101.0	32.2	32.7
- 日文	58名	52名	161.4	163.7	241.0	102.0	33.7	34.1
- 歴史	55名 (1名)	53名	149.9	150.0	224.0	101.0	29.4	30.0
教育学部 236名	234名 (2名)	236名	154.9	154.9	280.0	59.0	32.7	32.7
- 幼教	112名	112名	146.0	146.0	241.0	59.0	30.5	30.5
- 学教	88名 (1名)	89名	162.9	162.9	249.0	102.0	31.7	31.7
- 特支	34名 (1名)	35名	163.8	163.8	280.0	114.0	34.5	34.5
人間社会学部 199名	195名 (4名)	187名	135.8	139.2	234.0	80.0	31.1	29.9
- 人社	88名 (1名)	77名	134.5	142.5	216.0	80.0	33.9	31.3
- スポ	107名 (3名)	110名	136.9	136.9	234.0	91.0	28.6	28.6
薬学部 142名 <sup>※1</sup> +2名 <sup>※2</sup>	140名 (4名)	142名	169.3	169.1	260.0	104.0	32.2	32.3

※1 薬学部留年生除く

※2 入学前単位認定者

表 11. 2020 年度アチーブメントテストの学科・専攻別結果

2021/01/20本試験実施

2021/02/05追試験実施

	受験者数 ( )内は欠席者数	英語 履修者数	平均点		最高点 (300点)	最低点	標準偏差	
			全体	英語 履修者			全体	英語 履修者
全体 675名	599名 (76名)	670名	150.6	150.8	255.0	64.0	32.8	32.8
文学部 113名	105名 (8名)	105名	151.3	151.7	243.0	102.0	30.1	30.5
- 日文	56名 (1名)	52名	157.2	157.9	243.0	102.0	30.1	30.6
- 歴史	49名 (7名)	53名	144.6	146.6	229.0	109.0	28.9	30.7
教育学部 234名	205名 (29名)	236名	156.3	156.3	251.0	64.0	31.3	31.3
- 幼教	97名 (14名)	112名	147.8	147.8	251.0	64.0	31.1	31.1
- 学教	76名 (13名)	89名	166.9	166.9	251.0	93.0	32.2	32.2
- 特支	32名 (2名)	35名	156.6	156.6	197.0	95.0	21.1	21.1
人間社会学部 195名	170名 (25名)	187名	134.9	135.2	239.0	67.0	29.9	30.3
- 人社	77名 (10名)	77名	137.5	138.6	239.0	87.0	31.5	32.5
- スポ	93名 (15名)	110名	132.7	132.7	197.0	67.0	28.4	28.4
薬学部 133名 <sup>※1</sup>	119名 (14名)	142名	162.3	162.3	255.0	94.0	33.4	33.4

※1 薬学部留年生除く

2020年度両テスト結果は表10・表11の通りである。同一の学年のプレイスメントテストからアチーブメントテストへの英語履修者の平均点の変化は、入学時から約9か月後の英語力の推移を示すことになる。2018年度は平均点が1.2点増加したが、2019年度は4.2点減少し、2020年度は3.0点の減少だった。2020年度はコロナ禍のため授業方式が一定でなく学生も教員も困惑しながらの英語授業であったため、英語力の向上に不安があったが、それほど大きな影響はなかったのかもしれない。ただ、2020年度のアチーブメントテストの実施時期が大阪の緊急事態宣言下であったこともあり、受験者数が2019年度よりも少なかった。テスト受験率でいえば、92.4%から88.7%まで低下した。そのため、これらの数値から確かな結論を引き出すことは困難であろう。

### 3.3. 今後に向けて

2018年度に初めて試験を実施した時は手探り状態であったが、教務課や各学科、アクセスルームなどの協力を得て、回を重ねるごとに作業も単純化してきた。こうした理由から、2020年度のコロナ禍の状況においても、これまでと同様に試験を運営することができた。

2020年度には2回生対象のアチーブメントテストを中止した。2021年度以降の実施については、カリキュラム体制や英語授業の運営を見直したあとで、再開を検討する。

アチーブメントテストを1年次だけでなく複数学年で行いデータを分析することで、本学での英語の学びの効果検証を行うことができるであろう。プレイスメントテストからアチーブメントテストにかけて大きく英語力が向上した学生に焦点を当て、その理由を探ることで、本学学生にとっての効果的な英語学習が見えてくることが期待される。

## ACE PROGRAM

### 2019 CREATING AN ACE CULTURE

After establishing a presence at Osaka Ohtani in our freshman year, the goal for 2019 was to encourage student participation at ACE and with ACE events. The goal for 2019 was to begin developing an *ACE Culture*. We sought to do this by providing quality opportunities to interact with ACE resources, staff and instructors.

In fact, at the end of the previous year it was noted that:

“We let students know about ACE; so, this year, we want to create an *ACE culture* by developing community of students and teachers.” 2018

In 2019, we decided to go ahead with developing and supporting a language learning community, held together by the goal of capitalizing on the learning opportunities present in every interaction.

### Learning in Lessons

#### INTRODUCTION OF FUNCTIONAL / THEMATIC UNITS

Building on the success of our freshman year, we focussed our efforts on developing and delivering high quality language learning experiences for the students of Osaka Ohtani University. To do this, ACE Lessons were re-structured into thematic sections. A concurrent theme running through these lessons was supporting students’ abilities to form and express opinions and ideas. We maintained a class schedule of one unit per week, allowing students ample opportunity to participate. Subsequent classes built on what had been previously learned. This allowed students to feel a sense of progression and development. In addition, previously learned skills were recycled and implemented in later units, so students had the opportunity to practice and reinforce prior learning.



Figure 1 2019 ACE Lesson schedule

## *INTRODUCTION OF ONLINE LESSONS*

In addition to the re-structuring of units, we also decided to provide online variations of ACE lessons. These lessons were designed as self-study units which students could go through at their own pace. This was to allow students who were unable to participate in face-to-face lessons due to conflicting schedules a chance to learn material different than the university's course of study. Online lessons focussed more on listening and reading and responding via structured writing assignments rather than pronunciation and speaking done in the face-to-face lessons. Lessons were delivered via Moodle, making full use of the capabilities that the current installed version of Moodle allowed for, including auto-marking and registering lesson progress. In addition, the ACE instructor oversaw student work and provided formal feedback on assignments as well as informal commentary via chat and discussion modules.

### **Learning by Doing**

In 2019, we also introduced activities that did not focus as much on learning English as it did on interacting with each other *using* English. In the English Café, conversations were aimed at having students interact with each other. It was incredible to see conversations occurring between students of different faculties and from different grades. Strong bonds were formed and school and even life advice were shared between juniors and seniors. We also started using board games to help with this interaction. Recently, board games have become popular as an alternative to the online interaction that has been dominating much of modern life. We looked at several popular board games and brought the English versions into the English Café for students to play with. The students really enjoyed these kinds of activities and appreciated the opportunity to use English in fun and creative ways. As a result, we saw a greater number of students coming to the English Café not only during lunch breaks, but also throughout the day.



*Figure 2 Students in the English Cafe*

Supporting this peer interaction, we also developed material to encourage students to use phrases common in daily communication. This was done by providing periodicals (newspapers and magazines), which touched on current events. A short summary of key news developments was also prominently displayed in the English Café to provide an overall understanding and foundation for conversation about important developments. *Word of the Day* posters were also prominently displayed around the ACE facility, and students were encouraged to use a new word each day in their interactions with each other and the instructor. Moreover, we developed our own ACE TV program that combined many of our initiatives including *One Minute English*, *Word of the Day* and *Puzzle Challenge*. It also spotlighted what was currently going on in the world and gave information about upcoming ACE events.

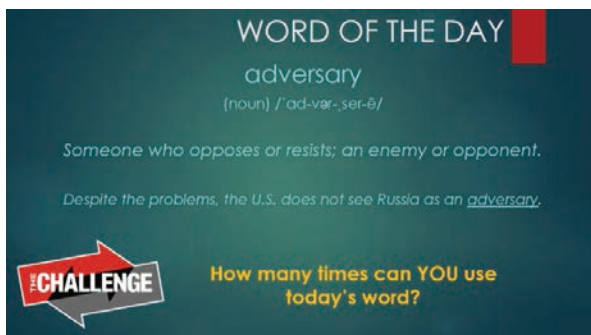


Figure 3 Example of "Word of the Day"



Figure 4 ACE TV title screen

### More Learning Opportunities

In addition to changes in the English Café, we also encouraged more student participation in our annual events, including open campuses, Halloween and Christmas events. During open campuses, we asked students to create videos that introduced aspects of ACE. These videos were accessible via a QR code and were presented in an Augmented Reality (AR) format for visitors. We also had students present during open campuses to interact with visitors. The novelty of AR presentations and the ability to talk to university students about their experiences at Osaka Ohtani was of great value to visitors who spent more time at ACE than in the previous year. In fact, that it was still difficult to attract visitors to ACE, those that did come not only stayed longer, but participated in more events offered by ACE including demonstration lessons and information sessions about English proficiency tests (TOEIC & Eiken). Moreover, university students were also able to practice *One Minute English* mini lessons with visitors. *One Minute English* is a compact conversation lesson that can be quickly used to practice and analyze English abilities. Student volunteers were provided training and support to carry out what are basically informal proficiency tests and microteaching lessons. Students were given a worksheet (see figure) to guide them in identifying key areas to develop. Visitors enjoyed the opportunity to practice their English and Ohtani students welcomed the chance to practice what they have been learning in classes to guide and counsel students.



## 2020 RESPONDING TO CHALLENGES

The 2020 academic year was severely impacted by the emergence of and Japan’s response to COVID-19. Specifically, restricted mobility and social distancing severely impacted how students learn and how educators deliver lessons. Responding quickly and effectively to balance the unique needs of the situation as well as the academic requirements of the school was and continues to be an ongoing challenge. As many educators eventually came to realize, it was important to address not only students’ academic needs, but their social and emotional well-being as well.

Logistically, students were unable to come to the campus to attend classes; so, Osaka Ohtani adopted online delivery of lessons, either on-demand (asynchronous) or live (synchronous using video conferencing platforms). In addition, the university committed themselves to fully using their recently developed LMS, *tani-Wa*, moving away from Moodle.

### Delivery

The initial reaction by many was to “re-create” face to face lessons online. Unfortunately, as many educators realized, online learning possesses its own unique benefits and limitations. Fortunately, as in the previous year, ACE had already worked with delivering lessons online, ACE was better prepared to meet the unique demands of an online learning environment.

ACE lessons were migrated from Moodle to *tani-Wa*, with units being delivered both synchronously and asynchronously. ACE lessons were scheduled so that students could participate via video conferencing or could do these lessons online at their own convenience, which could then be checked by an instructor.

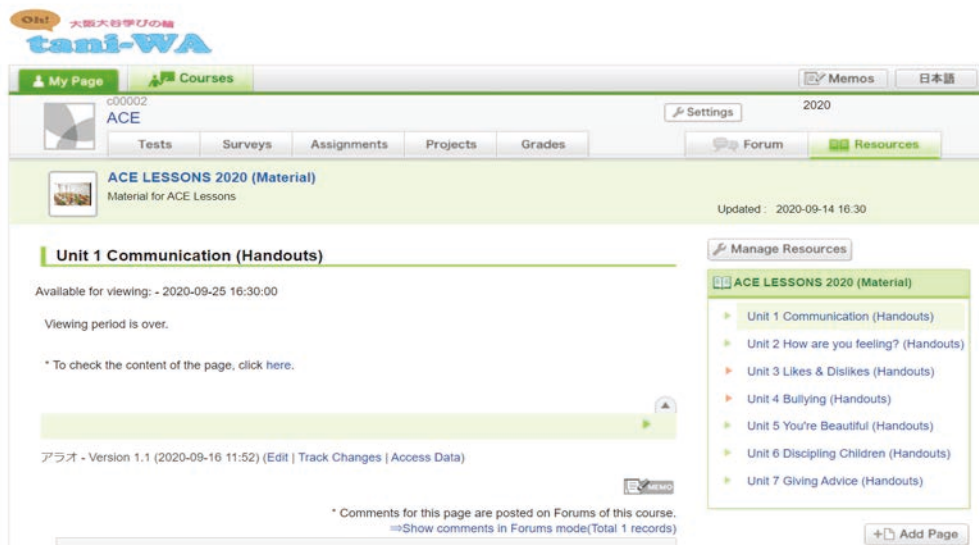


Figure 7 Screen shot of ACE Lessons migrated to Tani-Wa

Lunch conversations were also open via video conferencing but as school schedules were only loosely being followed, participation was sporadic. Therefore, the instructor invited students to make appointments when students could video conference and talk about any topics they wanted to discuss or to get help with assignments and questions. In this way, if student had similar issues or wanted to talk about similar topics, they could be grouped in the same appointment.

Open campuses were also moved online, using video blogs and updates to Facebook and Instagram. ACE contributed by creating its own promotion video showcasing the facility's features. Perhaps because of its success with the previous year's online lessons, or because teachers have come to view ACE as a good resource, several faculty members reached out to ACE for guidance on how to implement online classes effectively.

### **Quality of Content**

One key concern when migrating courses online, was how to maintain lesson quality and integrity. More often than not, content and follow up questions would be uploaded without much attention to the quality of learning or engagement of the student. As a result, learning opportunities became little more than watching a video and answering questions. Lessons delivered via video conferencing platforms also suffered a degradation in quality, where students would listen to a lecture online, with little to no participation or engagement.

One of the hallmarks of ACE Lessons is the focus on developing communicative ability. As such, the lack of participation and engagement was of particular concern. To combat this, instructors took advantage of the asynchronous nature of online learning by adding pre- and post- lesson modules. Students were asked to review content prior to taking the lesson. During the lesson, that review would be used to facilitate discussion. Online lessons allow for multiple participants simultaneously, so students could easily be broken into conversation groups to discuss various aspects of topics and to share and compare idea. After the lesson, students were asked to bring together what they had learned and prepare it for use the following, connected lesson. Because lessons had already been organized into thematic units, this provided continuity to learning which supported student engagement.

We decided to deliver our Halloween event online as well but chose to enhance the experience by incorporating student feedback. In the previous year, students requested more "entertaining" events, more opportunities to "play with English". With that in mind, we designed the Halloween event around a murder mystery theme. Students were assigned character roles. These characters would be fleshed out during the event using question and answers. Eventually, students would be able to know enough about each other to suss out who had committed the crime of the evening. The patterned script established character profiles, and repetition of similar phrases allowed for increased practice for lower-level students, while higher level students had room to be creative by adding backstories to their character profiles. The event was held via a video conferencing platform where students could exchange partners virtually. In addition, students were given the opportunity to "vote" on who has the criminal, with results



being available in real time. Students in general enjoyed the event and requested similar events be held in the future.

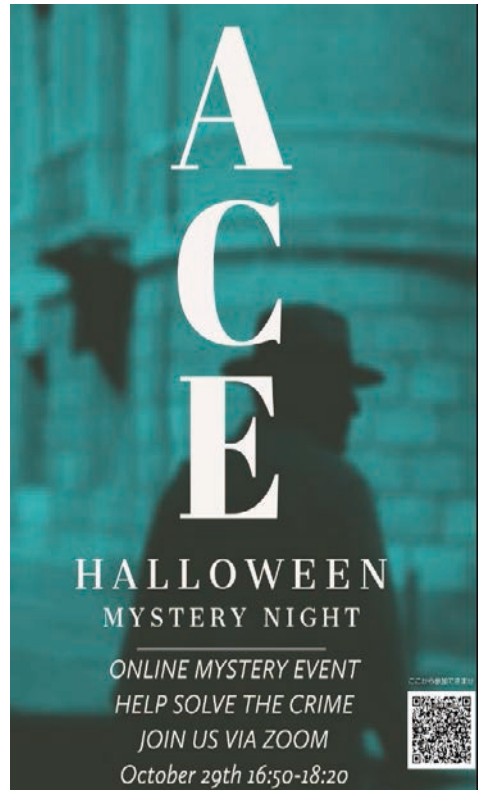


Figure 8 2020 online Halloween event and poster

### Zoom Fatigue

Despite the success of ACE’s online lessons, there was one development that few people foresaw—what many now refer to as *ZOOM fatigue*. Zoom fatigue is a recent phenomenon where the hyper usage of online communication has resulted in people becoming tired, feeling worried and being restless or uneasy. Though little is still known, there are several ideas why Zoom fatigued has been happening.

Learning is primarily a social act and despite the visual interaction afforded by video conferencing, it still lacks the personal and social dimensions of face-to-face lessons. In a classroom, students are able to interpret visual cues (i.e., body language and facial expressions) to help them process meaning. Moreover, the investment of attention to what is occurring in the environment has an immediate and direct consequence or *payoff*. Online communication, with the current limitations of our technology, dramatically restrict visual cues by focussing solely on the speaker’s face. Additionally, lags in transmission result in delayed gratification of paying attention to what is being said. For some students, paying attention requires substantially more effort as they wrestle with the distractions abounding in their home environment. Other students “distrust” what is being said, finding it difficult to find pertinence or meaning in the

activities that they are being asked to do. Interacting via online platforms is also more cognitively taxing as individuals must carefully consider what they type or say. They must understand what is being asked of them, develop their opinion, weigh the cost of what they are saying, and evaluate the accuracy of their response, each “task” done deliberately, creating a very unnatural context for communication. To put it another way, there is no backspace or delete in face-to-face conversation. Combined with a disruption in daily schedules, with little routine or predictability, a pervasive fear and apprehension surrounding social interactions, and no definite end to the situation, it is not surprising that the result would be a mind space of unease and unrest.

It is not uncommon for university students to feel overwhelmed, as they become solely responsible for managing their own time and prioritizing tasks. Unfortunately, with this new situation, many more students are unable to manage themselves effectively, resulting in assignment being late, poorly executed, or even abandoned.

### **Opportunities for face-to-face interaction**

It became important to provide students with opportunities to re-adjust. The restricted opening of the university and the return of face-to-face classes was a welcome relief and helped alleviate some of the stress students were feeling. Fixed schedules also proved helpful to students’ task and project management.

For ACE’s part, we looked for ways to provide more face-to-face interaction that allowed students to socialize and enjoy using English in a safe space. We re-opened both the English Café and the ACE Materials Room, with limited access and social distancing measures in effect. We also implemented several initiatives to facilitate student interaction. The first initiative was to develop an informal *book club* that asked students to meet once a week to discuss a chapter of a book. The response was overwhelming, as almost a dozen student participated over the course of six weeks.

The second initiative was to go ahead with our annual Christmas event with some slight modifications. Students were invited to do a one-on-one interview to talk about their winter activities as well as their favorite Christmas songs. These interviews were recorded and combined into a one-hour video, which was subsequently uploaded to the university Stream account. Doing this allowed for participation from all students, faculty and staff at Osaka Ohtani University, who could watch and comment on the video. Creating the video was another fun activity for students to use their English to communicate their interests, and the sharing of the video was a way to introduce students to the world of digital creation and communication (e.g., YouTube, Discord, Twitch etc.). In all, 12 students participated, sharing their favorite Christmas songs. In addition to a small screening for students during lunch, the video was seen by 31 individuals online over the winter break. Furthermore, we continued with our annual *Winter Event*. This year, we held a photojournalism contest inviting students to submit their favorite

winter photos as well as a short, descriptive essay. Both events were successful with a number of students participating, and students from various departments visiting ACE for the first time.



Figure 9 2020 Christmas and Winter Events

## 2021 AND BEYOND

Coping with this historic situation has not been easy, but we are emerging from it. And we are doing so with a better understanding of ourselves as education professionals, and as individuals. Despite the challenges, ACE has managed to maintain its progress and after three years of steady growth, ACE is in a good position to continue expanding its reach. At the same time, it is vital we keep pace with the changing landscape of education, particularly in terms of electronic learning.

Moving forward, revisiting ACE’s infrastructure particularly resources available and delivery of these resources is high on our agenda. Establishing a dedicated language lab should be high priority—creating a learning space that leverages current gen technology such as virtual learning and Web 2.0 resources to provide the best language learning experience for our students. Over the past several years, we have noticed that the students who regularly visit ACE are instrumental in creating a sense of community. Supporting these students’ interest is also important and we should take steps to encourage more active participation. In the past, student involvement has been limited to supporting roles at open campus events and special functions. However, allowing students to be more active, to allow them to pursue English activities that they are interested in is an opportunity not only for students to develop their English abilities, but also for ACE to develop as a legitimate resource center. We have already begun steps toward the formation of a dedicated English club which will be responsible for organizing and coordinating English functions at the university. In addition, there has been strong interest from students to participate in speech contests or to attend and even present at academic conferences. Unfortunately, the COVID-19 situation halted much of this last year, but with the support of ACE, these programs can be realized in the near future. Such initiatives supported by

ACE that are led by students, and directed toward students' interests ensure that we remain effective and pertinent.

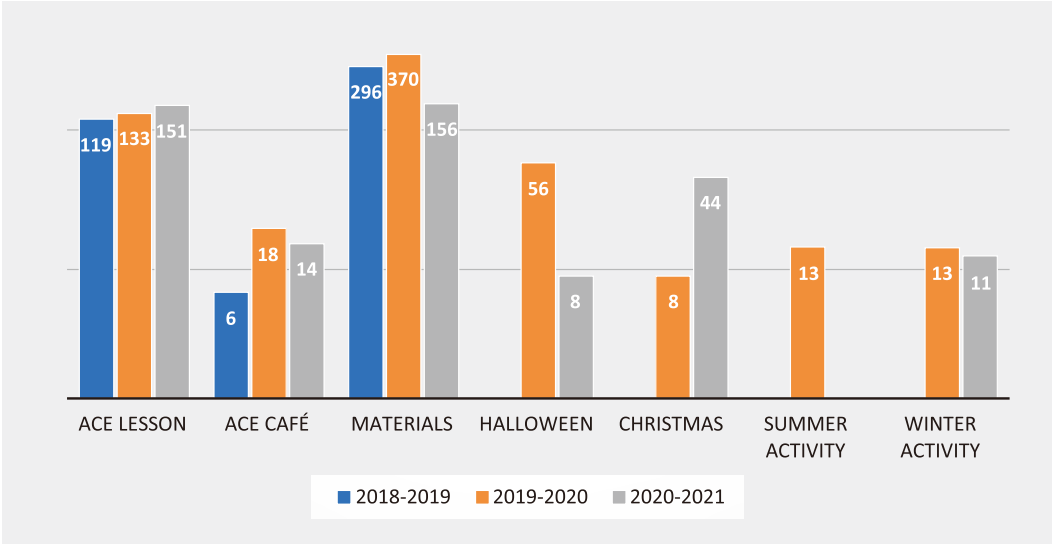


Figure 10 Participation at various ACE events 2018-2020

## 学習支援

### 1. e-Learning プログラム

学習時間を確保（授業外学習）する必要性から、e-Learning プログラムを本学でも英語教育の一環として導入している。しかしながら、本学の学生の英語学習に対する動機づけは比較的低く、e-Learning 学習を学生の自主利用に任せていると、実効性が極めて低くなる傾向にある。そこで本学では、英語 IA/IB 及び英語 IIA/IIB（再履習クラスを含む）の成績評価 10% に e-Learning プログラムに設定された課題達成度を含めることで、学生の取り組み意欲の向上を図ってきた。加えて、英語 IA/IB、英語 IIA/IIB を履修していない学生（以下、自習者）にも自発的に利用してもらえるような工夫も行った。なお、2017 年度の導入・設置経緯や 2018 年度までの運用状況に関しては、『ACE Review 2018』において、詳しく紹介している。

#### 1.1. 2019 年度

本学の e-Learning は 2017 年度より ReallyEnglish 社のプログラムを利用している。初年度は TOEIC®対策教材である、KICKOFF FOR THE TOEIC® L&R（以下、KICKOFF）を、翌年には Practical English 7 を導入した。Practical English 7 の導入により、学習者は自分に適切なレベルの英語学習プログラムに取り組めるようになった。しかし、英語履修者や英語授業担当教員にアンケートを行ったところ、より学習意欲に繋がりやすいプログラムを要望する声もあることが明らかとなった。そこで、2019 年度からは日常、ビジネス、旅行などの豊富なトピックでコミュニケーションの基礎を学習する Practical English Starter を英語 IA/IB の学生向けに導入した。Practical English Starter の感想等は e-Learning のアンケート調査の考察でも言及するが、履修者及び英語授業担当教員からともに肯定的な評価を得た。2019 年度の英語履修者の e-Learning 利用状況は表 12 の通りである。

表 12. 2019 年度共通教育英語履修者の e-Learning 利用状況\*

		登録率		課題達成率			課題「0」の割合		
		(%)	比較 対前年度	(%)	比較 対前期	対前年度	(%)	比較 対前期	対前年度
1回生 英語IA/IB	前期	97.9		79.3		7.8			
	後期	98.6		75.5	-3.8	15.3	+7.5		
	年間	98.3	+4.2	77.4		11.6		-14.9	
2回生 英語IIA/IIB	前期	94.3		74.8		15.2			
	後期	95.8		74.3	-0.5	17.8	+2.6		
	年間	95.1	+3.5	74.6		16.5		-12.0	
合計	前期	96.1		77.1		11.5			
	後期	97.2		74.9	-2.1	16.6	+5.1		
	年間	96.7	+3.8	76.0		14.0		-13.4	

\*再履修クラスを除く

2019年度の利用状況は2018年度と比較すると、登録率及び課題達成率の増加が著しく、課題実施数「0」すなわち課題をまったく行っていない学生の割合も大幅に減少している。e-Learning プログラムに設定された課題達成度が成績評価の10%になることが、英語授業担当教員を通して、履修者に浸透してきたと言える。

アカウント登録数及び利用率の向上を目的として、本センターでは様々な取り組みを行ってきた。その一つに「e-Learning 学内相談会」が挙げられる。これは e-Learning 導入時より継続して実施しており、特に 2019 年度は自習者に広く e-Learning を知ってもらうことに焦点を当てて取り組んだ。掲示やホームページに掲載する案内には「e-Learning でどんなことが学べるか?」や、「TOEIC®対策としての e-Learning 活用」など、自習者を意識したものとし、また、学部・学年に関係なくどの学生でも参加できるよう、2018 年度より実施回数を増やし、5 月と 7 月のそれぞれ 1 週間実施した。2019 年度の e-Learning 学内相談会実施状況は表 13 の通りである。

表 13. 2019 年度 e-Learning 学内相談会実施状況 (5 月・7 月)

日時	場所	担当者	参加者	
			英語履修者	自習者
5/13~5/17	4-505 (情報Ⅲ)	森本	10名	1名
7/15~7/19	12:25~12:55		9名	1名
合計			19名	2名

夏休み期間には ACE プログラムと共同で Summer Activity を計画した。長期休み期間でも英語学習に取り組めるものとして、e-Learning 学習は最適である。TOEIC®受験を考えている、または受験する予定の学生に焦点を当て、TOEIC®対策教材として e-Learning に取り組めるよう、KICKOFF を活用した企画を行った (図 11)。

このように、英語履修者や自習者に e-Learning の利用を広く推奨し、その結果、真摯に取り組んだ学生を表彰する制度を設けている。例年実施している「e-Learning 表彰式」では全学部生を対象に、指定した期間の e-Learning 学習成績を集計し、優秀者に表彰を行っている。表彰の要件は 1) 対象期間内に 35 時間以上を学習していること、2) e-Learning の成績が良好なこと、としており、2019 年度には最優秀者 2 名と優秀者 1 名が選出された (表 14)。これまでと同様、表彰式は学長室で執り行われ、受賞者には賞状を授与し、副賞を贈呈した (図 12)。



図 11. 2019 年度 Summer Activity フライヤー



図 12. 2019 年度 e-Learning 表彰式

表 14. 2019 年度 e-Learning 表彰式の受賞

	学部・学科	学年	クラス	学習時間
最優秀賞	人間社会学部 人間社会学科	3回生	自習クラス	150時間5分
	薬学研究科 薬学専攻	博士課程	自習クラス	108時間25分
優秀賞	薬学部 薬学科	1回生	英語Iクラス	35時間5分

## 1.2. 2020 年度

2020 年度は新型コロナウイルスの影響で学生が登学停止となったため、学生が自宅で英語学習に取り組めるよう、e-Learning の配信時期を前年度よりも 4 週間早めた。また、各学生が自身の英語力に合ったコンテンツを選択することができるように英語 IA/IB 及び英語 IIA/IIB の履修者に Practical English 7 の利用案内を配信した。加えて、2020 年度から新たなプログラムである Word Mine を導入した。Word Mine は単語学習・語彙力強化のためのプログラムである。本学の学生は 30 分以上かけて通学する者も多いため、通学途中のいわゆる「隙間」時間に、英語語彙力をアップするプログラムを活用してもらいたいということが、このプログラムを導入した狙いである。なお、2020 年度の英語履修者の e-Learning 利用状況は表 15 の通りである。

表 15. 2020 年度共通教育英語履修者の e-Learning 利用状況\*

		登録率		課題達成率			課題「0」の割合		
		(%)	比較	(%)	比較		(%)	比較	
			対前年度		対前期	対前年度		対前期	対前年度
1回生 英語IA/IB	前期	92.8		70.5			15.5		
	後期	96.0		68.1	-2.4		21.2	5.7	
	年間	94.4	-3.8	69.3		-8.1	18.4		+6.8
2回生 英語IIA/IIIB	前期	99.6		74.1			14.5		
	後期	99.6		78.0	3.9		14.7	0.2	
	年間	99.6	+4.6	76.1		+1.5	14.6		-1.9
合計	前期	96.2		72.3			15.0		
	後期	97.8		73.1	0.8		18.0	3.0	
	年間	97.0	+3	72.7		-3.3	16.5		+2.5

\*再履修クラスを除く

2020 年度の利用状況を 2019 年と比較することは困難である。なぜならば、新型コロナウイルス感染拡大の影響で、配信時期・プログラムもイレギュラーであったためである。また、利用方法の指導や利用の促進もほぼオンラインのみで行ったため、例年と比べて情報が十分に伝わっていなかった可能性がある。それでも表 15 の結果を見ると、コロナ禍の中であっても登録率を 9 割以上で維持できたことが分かる。また、課題の達成率を 7 割以上とすることができたのは、履修者に頻繁に連絡して利用を促していただけた、英語授業担当教員のおかげである。

2019 年度と同様、利用率向上への取り組みとして、掲示・ホームページ以外の方法では、英語授業担当やゼミ担当の教員を通じて e-Learning について周知した。また、自習者の利用率向上を目的として、2019 年度に引き続き Summer Activity も実施した。2020 年度は TOEIC®受験を目指す学生に KICKOFF を案内するだけでなく、語彙力アップを目指す学生に Word Mine を推奨するなど、目的に合わせて e-Learning を活用する方法を企画した (図 13)。また、長期休みが終了しても継続して取り組める仕組みとして、Summer Activity として取り組んだ受講時間は e-Learning 表彰にもカウントすることとした。これが功を奏し、2020 年度に学長室で執り行われた表彰式 (図 14) では表 16 の通り、最優秀賞 1 名、優秀賞 3 名が選出されたが、この内の 2 名が Summer Activity 企画の参加者であった。



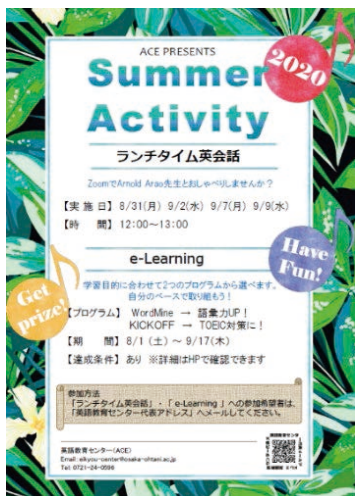


図 13. 2020 年度 Summer Activity フライヤー



図 14. 2020 年度 e-Learning 表彰式

表 16. 2019 年度 e-Learning 表彰式の受賞

	学部・学科	学年	クラス	学習時間
最優秀賞	人間社会学部 人間社会学科	4回生	自習クラス	150時間45分
優秀賞	教育学部 教育学科	2回生	英語IIクラス	41時間33分*
	教育学部 教育学科	1回生	英語Iクラス	41時間3分
	人間社会学部 人間社会学科	1回生	英語Iクラス	36時間5分*

\* Summer Activity企画、参加者

### 1.3. アンケート調査

e-Learning の利用を促進するためには、実際に使用している学生の意見を聞くことが重要である。本学の場合は表 12・表 15 の通り、共通教育英語履修者の e-Learning 登録率が 90%を超えているので、この英語履修者を対象に e-Learning に関する利用意識を探ることとした。加えて、学習を促す役割を担う教員側の意見・感想を聞くことも行った。2019 年度は新しいプログラムとして Practical English Starter を導入し、英語 IA/IB の学生に配信したので、その有効性や効果についての考察を行った。なお、2020 年度のアンケート調査は現在（2021 年 1 月末日）集計中である。

### 1.3.1 実施時期・対象

アンケート調査は、学生・教員ともに英語 IA/IB 及び英語 IIA /IIB の後期授業の第 15 週目に実施した。事前に学生向けアンケートとマークシートを授業担当教員へ配布し、授業内で実施してもらうよう依頼した。英語 II の内、2 クラス (計 54 名) においては実施できなかったため、2019 年度の配布枚数は実際の履修者数 (715 名) よりも 54 枚少なくなっている。また、教員向けアンケートについては期限内に教務課または英語教育センターに提出してもらう方法をとった。回収率などの詳細は表 17・表 18 の通りである。

表 17. 教員向け  
アンケート調査の実施詳細

対象教員	23名(21)
回収枚数	22枚(20)
回収率	96%(95%)

( )内は2018年度の数字

表 18. 学生向けアンケート調査の実施詳細

	英語I <sup>※</sup>	英語II <sup>※</sup>
配布枚数	695枚 (741)	661枚 (729)
回収枚数	599枚 (651)	553枚 (582)
回収率	86% (88%)	84% (80%)

※再履修クラスを含む

( )内は2018年度の数字

### 1.3.2 学生向けアンケート調査結果

アンケート内容は6つの項目を設定し、回答は5段階評価とした。各項目の内容と集計結果を以下にまとめた。「設問1. e-Learningをどのくらい利用していますか？」に対する回答は図15の通りである。

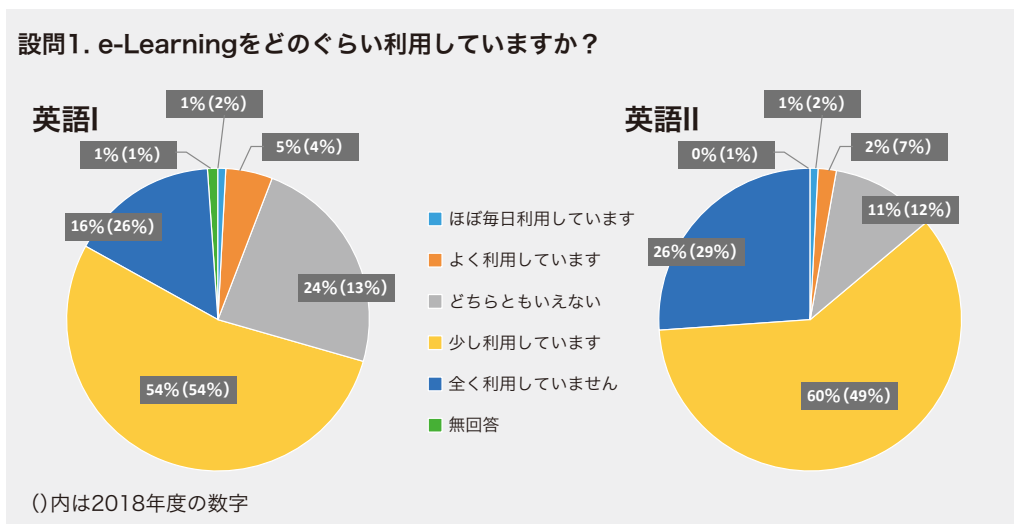


図 15. e-Learning の利用頻度

2018年度の調査では「全く利用していません」と回答した学生が英語Ⅰ、英語Ⅱにおいて3割近くとなっていたが、2019年度の調査結果ではともに減少している。特に2019年度の英語Ⅰ履修者の回答は2割まで減少した。

「設問2. どんな機器を使って e-Learning を利用していますか？」については、2018年度は大半の学生が携帯電話やスマートフォンを使うと答えていたが、自宅や大学のパソコンを使用する学生も少なくなかった。一方、2019年度は携帯電話やスマートフォンを使う学生の人数がさらに大幅に増えている（図16）。

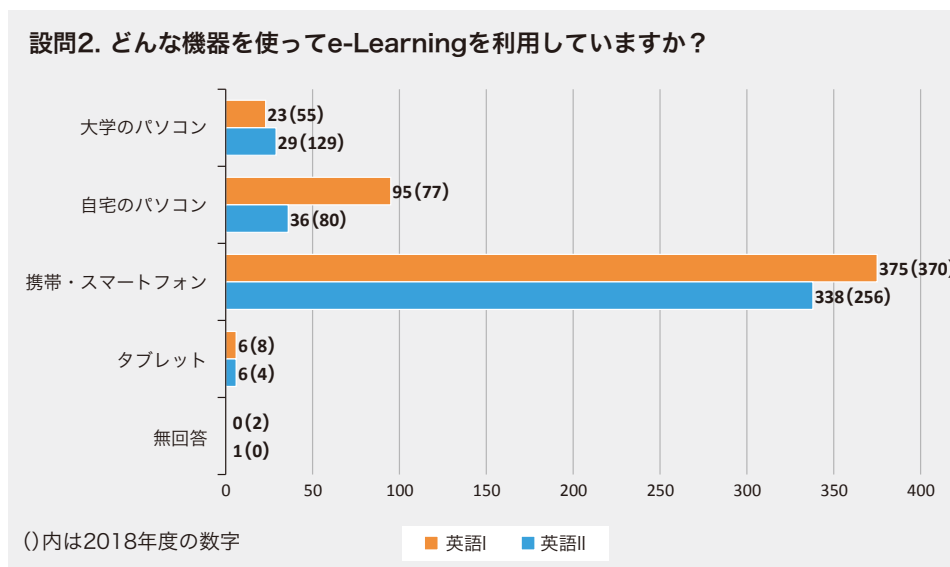


図16. e-Learning を利用するとき使用する機器

「設問3. 今利用している e-Learning の難易度は適切ですか？」について、Practical English 7 を利用している英語Ⅱ履修者は約4割の学生が「まあまあ適切です」と回答しており、2018年度とあまり変化が見られない。その一方で、2019年度新たに導入した Practical English starter を利用している英語Ⅰ履修者は、「まあまあ適切です」や「非常に適切です」と回答している学生が2018年度よりもおよそ1割増えている（図17）。

「設問4. 今後、英語の授業がなくても引き続き e-Learning を利用したいと思っていますか？」については、英語の授業がない場合は「引き続き利用しようと思わない」学生が2018年度と同様多かった。その一方で「利用したい」という学生も増加していた。回答総数は減っているものの「利用したい」という学生が増加（21名）したことは特徴的である。こういった学生のニーズに、より応えられる内容を探っていきたい（図18）。

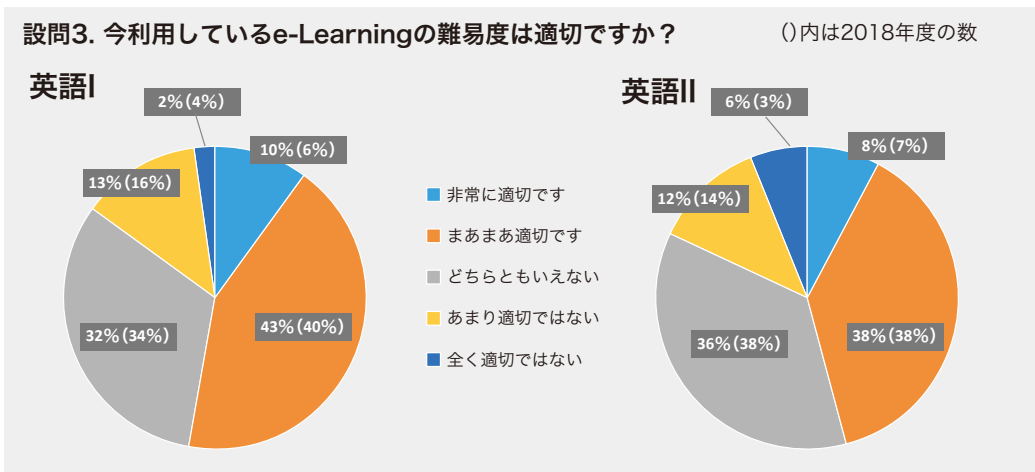


図 17. e-Learning の難易度について

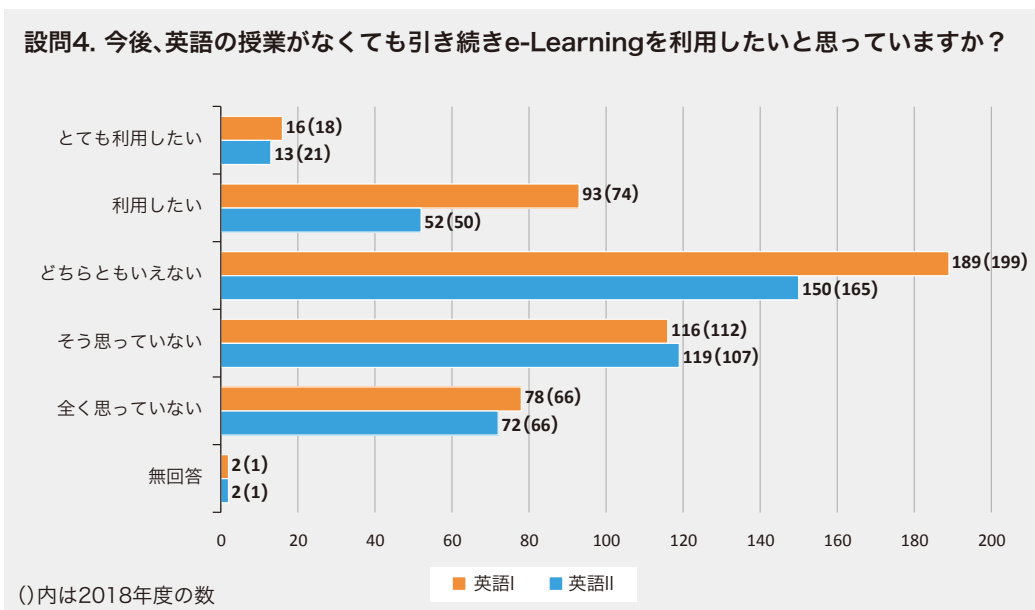


図 18. 今後の利用について

設問1で「全く利用していない」と回答した学生には「設問5. 全く利用していない理由は何ですか？」の回答へと進めてもらった。「本当は利用したいが、毎日忙しくてなかなか利用できない」といった学生が2018年度と同じように5割ほどを占めている(図19)。また、利用できる環境が整っていない学生については、できるだけ大学の設備の利用を勧めたい。なお、「やり方が分からない」や「ログインできない」、「忘れていた」と回答する学生

数は 2018 年度よりも大幅に減少している。これは英語授業担当教員から学生に利用案内を促していただいたこと、そして ACE が主催する e-Learning の説明会や、ACE 事務局での随時個別指導などが効果を上げたと考えられる。

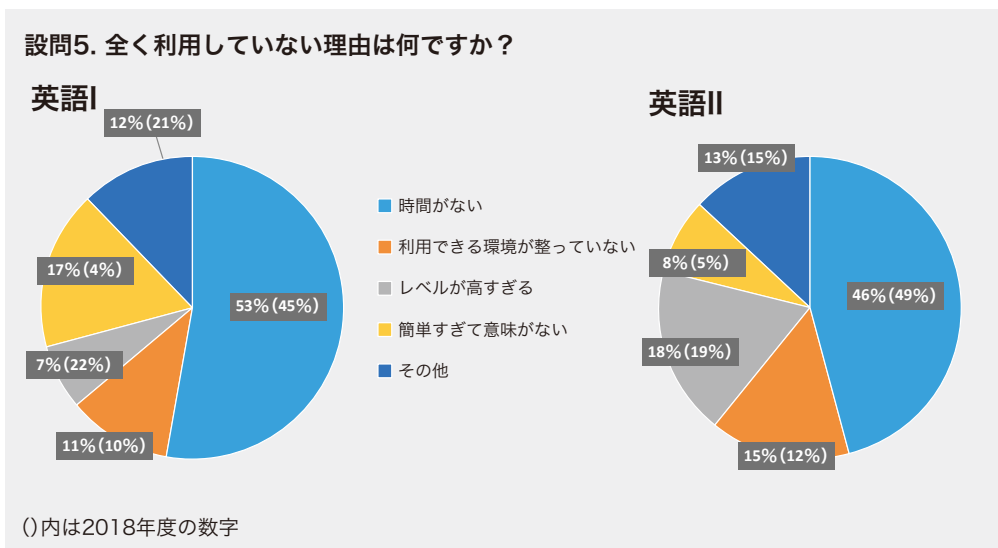


図 19. 全く利用していない理由

表 19. Q5 のその他を選んだ学生の自由記述

記述内容	出現回数※ ( )内は2018年度データ	
	英語I	英語II
やる気の問題	6 (14)	12 (20)
ログインできない	0 (8)	2 (0)
やる方が分からない	1 (6)	1 (1)
忘れていた	1 (6)	1 (2)
アプリの使い勝手が悪い	1 (6)	0 (2)
無記述	3 (7)	4 (6)
プリントの課題がいい	1	0

※似た記述をカウント

表 20. 他の e-Learning の記述

6. あなたは、本学の英語 e-Learning 以外にほかの e-Learning を利用していますか？

記述内容	英語I	英語II
	スタディサプリEnglish Facebook	Ohtaniドリル

### 1.3.3 教員向けアンケート調査結果

アンケート内容を 3 項目とし、回答は自由記述式で行った。各項目の内容と主な回答記述及びその出現回数（似た記述をカウント）をまとめたものが表 21 である。

表 21. 教員向けアンケート調査結果

調査内容	記述内容	出現回数 <sup>※</sup> ( )内は2018年度データ	
1. 担当学生の反応、 e-Learningレベルの 難易度について	・日常的に利用することは難しい	3	(5)
	・レベルが適切	10	(3)
	・レベルが高い	3	(8)
	・学生・クラス次第	6	(3)
	・無回答・特記事項なし	2	(2)
2. 授業との関連について	・授業と関連なし	6	(7)
	・授業と直接関連ないが、 何らかの工夫・形で関連させたい。 また将来、そうさせたい	8	(10)
	・その他	5	-
3. 英語教育センター事務の サポートについて	・無回答・特記事項なし	3	(4)
	・とても役に立った	14	(11)
	・無回答・特記事項なし	8	(4)

※ 重複記述もカウント

e-Learning の難易度について、2018 年度は英語 I、英語 II ともに「レベルが高かった」という意見の方が多かったが、2019 年度は英語 I においては「コミュニケーション内容が多い Practical English Starter を導入することによって、全体のイメージではレベルが適切・難しくない」という意見の方が多かった。一方、英語 II の Practical English 7 に関しては、標準クラスではそれほど難しくないと意見があり、逆に基礎クラスでは難しいという意見があった。

授業との関連性については、2018 年度と同様、何らかの形で授業と関連付けさせようとしていた教員が多い。加えて、日常英語や観光英語が多く含まれている Practical English Starter は授業のテキストと被っている内容があるため、授業の理解のサポート役を果たしているようである。また、成績の中に e-Learning の課題達成度を組み入れることによって、積極的に取り組む学生が出ているとの意見もあった。今後については、現在のプログラムを引き続き提供したいと考えている。

最後の英語教育センター事務のサポートに関しては、大半の担当教員がとても役に立ったとしており、また感謝のことが多く書かれたことから、事務のサポートには十分満足されていると考えられる。

## 1.4 今後に向けて

2019年度に導入した Practical English Starter は今までの e-Learning プログラムと異なり、より初級学習者向けに開発されたプログラムであり、TOEIC®や英検を受験した経験がない、または受験する予定がない学習者に合ったプログラムである。共通教育英語履修者及び英語授業担当者に好評であったが、2020年度は Practical English Starter を配信することができなかった。2021年度には配信できるように努力したい。

今後、学習者の英語コミュニケーション力や英語による話す力を向上するために、新たな e-Learning プログラム Virtual Live Training を導入したい。Virtual Live Training は実在の相手にオンラインでスピーキングのやりとりをするため、今までの e-Learning プログラムとはまた違った形で学習者に授業外学習の機会を与えることができる。KICKOFF をはじめ、Practical English 7、Practical English Starter、Word Mine につづき Virtual Live Training への加入で、ACE の e-Learning プログラムはより学習者の学習意欲に対応できることをめざす。

## 2. 検定試験

英検の取得級や TOEIC®スコアは学生自身の英語力を公的に証明できるものであり、留学や就職活動にも利用されている。ACE では英検・TOEIC®の申込受付や学内実施、試験対策のサポートを行っている。

### 2.1. 2019年度

英検が実施している年3回の試験を ACE では掲示等で学生に周知し、申込受付、および試験対策の教材案内を行った。表 22 に 2019 年度、英検の受験状況をまとめた。

表 22. 2019 年度英検の受験状況

	第1回検定試験			第2回検定試験			第3回検定試験		
	受験者数	一次合格	二次合格	受験者数	一次合格	二次合格	受験者数	一次合格	二次合格
準1級	1	-	-	-	-	-	2	1	1
2級	4	1	1	3	1	1	1	1	-
準2級	2	1	1	-	-	-	-	-	-
合計数	7	2	2	3	1	1	3	2	1

TOEIC® IP テストは、2019年7月14日(土)と11月30日(土)の2回実施した。英検と同様、掲示等で試験を周知し、申込を受付けた。試験対策としては教材案内に加え、セミナー室で「TOEIC®対策講座」を開催し、受験する学生の支援を行った。2019年度の対策講座の実施状況(表 23)と TOEIC®受験状況(表 24)を以下にまとめた。

表 23. 2019 年度 TOEIC®対策講座の実施状況

	日程	担当者	場所	内容	参加人数
第1回	6/11	小倉	セミナー室 (12:20~12:50)	リーディング	1名
	6/18			リスニング	4名
	6/13				8名
	6/20				4名
第2回	11/5	小倉	セミナー室 (12:20~12:50)	リーディング	3名
	11/12			リスニング	3名
	11/7				2名
	11/14				1名

表 24. 2019 年度 TOEIC®の受験状況

	日程	教室	受験者数	平均点
第1回	7/14 10:30~	11-301	34名	377.9
第2回	11/30 10:30~	11-301	30名	385.2

## 2.2. 2020 年度

英検は 2019 年度に引き続き、試験の周知、申込受付、試験対策をサポートする予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大の状況に鑑みて、第 1 回と第 2 回については申込受付を中止した（表 25）。

表 25. 2020 年度英検の受験状況

	第1回検定試験※1			第2回検定試験※1			第3回検定試験		
	受験者数	一次合格	二次合格	受験者数	一次合格	二次合格	受験者数	一次合格	二次合格※2
準1級	-	-	-	-	-	-	-	-	
2級	-	-	-	-	-	-	3	3	
準2級	-	-	-	-	-	-	-	-	
合計数	-	-	-	-	-	-	3	3	

※1 申し込み中止

※2 結果：未確定

TOEIC® IP テストも新型コロナウイルスにかかる状況から第 1 回目は中止を余儀なくされた。しかし、後期には学生の学びの機会を確保するため IP テスト（オンライン）を実施した。また、それにあわせてオンデマンド動画の形で対策講座を作成し、配信した。2020 年度、TOEIC®受験状況と対策講座の実施状況を以下にまとめた（表 26・表 27）。



表 26. 2020 年度 TOEIC®対策講座の実施状況

	日程	担当者	場所	内容	参加人数
第1回	中止	-	-	-	-
第2回	オンデマンド動画 公開日時：10/19～12/9	小倉	Microsoft Stream にて公開	リーディング リスニング	14 <sup>※1</sup> 33 <sup>※1</sup>

※1 Microsoft Streamでの再生回数

表 27. 2020 年度 TOEIC®の受験状況

	日程	教室	受験者数	平均点
第1回	中止	-	-	-
第2回 <sup>※1</sup>	11/26～12/9	-	47名	472.2

※1 TOEIC IPオンライン試験を実施

### 2.3. 今後に向けて

2020 年度は新型コロナウイルス感染拡大にともない、さまざまな制約がある中で検定試験の実施及びそれらに関する学習機会の提供については例年とは異なる形をとることとなった。こうした経験からの知見にもとづいて、検定試験や対策講座の対面実施とオンライン実施の併用や、e-Learning のより積極的な活用など、今後も社会情勢に応じて柔軟に対応し、学生の学習機会を確保する。

## 3. ACE 事務局

英語教育センター事務室で行っている学習支援は「教材貸出」、「e-Learning」、「検定試験」に分けられる。「検定試験」については前の項目で詳細を述べたため、ここではそれ以外の 2 つについて報告する。

志学館 5 階の英語教育センター教材室では、TOEIC®や英検などの資格・検定対策や、英文法・英会話などの英語学習を目的とする学生のために、試験対策教材及び語学教材の貸出を行っている。また、教育実習や模擬授業の教材として、中学校・高等学校の英語教科書・音声 CD・指導書も取り揃えている。

### 3.1. 2019 年度

2020 年度には小学校高学年において教科として英語が加わることもあり、2019 年度は初等英語に関する教材を購入、配架した。2019 年度の教材貸出状況は表 28 の通りである。

表 28. 2019 年度教材貸出状況

	月	貸出者数 (名)	合計冊数 (冊)
2019年	4月	23	26
	5月	33	45
	6月	18	25
	7月	21	44
	8月	4	7
	9月	11	22
	10月	33	50
	11月	42	54
2020年	12月	29	55
	1月	16	31
	2月	4	6
	3月	2	5
合計		236 <sup>※1</sup>	370

※1 重複者あり

また、e-Learning に関するサポートも行っている。ログイン方法やパスワード再発行などの手順に関する質問から、アプリの不具合といった機器トラブルなど、学生からの質問は多岐に渡る。また、共通教育科目の英語 IA/IB、英語 IIA/IIB の履修者は、e-Learning 課題達成度が成績評価の 10%に含まれているため、課題締め切り前には駆け込みで質問に来る学生が多く見られた。

### 3.2. 2020 年度

2020 年度は新しい試みとして、Oxford のデジタルコンテンツ「e-book」を導入した。単に読むだけでなく、Listening・Speaking など総合的な英語学習の提供を学生に広く案内する予定であったが、これは次年度に持ち越すこととなった。新型コロナウイルス感染拡大により、学生が登学停止となり、前期は教材室を閉室することとしたからである。後期はこれまでと同じ時間帯で閉室したが、教材室の換気や手指消毒、入室者は名簿に氏名を記入するなど、コロナウイルス感染拡大防止に努めた。2020 年度の教材貸出状況は表 29 の通りである。

e-Learning に関するサポートも問い合わせ先を英語教育センター代表アドレスとし、学生からの質問をメールで受け付けた。特に新生にとっては初めての e-Learning であったため、登録方法や学習方法に戸惑う学生も多く、アカウントを配信した 4 月・5 月には 30 件程度の問い合わせが届いた。

表 29. 2020 年度教材貸出状況

		2021/01/27までのデータ	
		貸出者数 (名)	合計冊数 (冊)
2020年	4月	1	1
	5月	0	0
	6月	0	0
	7月	0	0
	8月	1	1
	9月	7	11
	10月	19	27
	11月	18	32
	12月	20	43
2021年	1月	22	41
	2月	-	-
	3月	-	-
合計		88 <sup>※1</sup>	156

※1 重複者あり

### 3.3. 今後に向けて

検定対策の教材については毎年、新しいものが出版されるので、学生の要望に応じて豊富に取り揃えることを検討している。また、2021 年度は、Oxford のデジタルコンテンツ「e-book」を、セミナー室の iPad や教材室に設置している PC によって活用できるようにして、総合的な英語学習の機会を学生に広く提供する予定である。今後も ACE 事務局は教材貸出だけでなく、英語学習の相談に応じ、検定試験、e-Learning に関する質問に答えることで、学生が継続して英語を学べる環境づくりをサポートする。

## 入試作問改革

本学の入試形態においては、年間5回の英語の入試問題を作成している。

### 1. 2019年度

従来は作問チームの裁量に委ねられていた大問Ⅰの語彙・文法・語法問題の出題範囲の統一化を図るために「高等学校学習指導要領」で記載されている中から10項目にしぼり、出題範囲をより明確にした。また、これまで大問Ⅳの長文問題に含まれていた整序問題（英作文の力を確認するためのもの）を、本学のアドミッションポリシーを踏まえた日常会話の力を確認できる問題に変更するため、大問Ⅳから独立させ大問Ⅴとした。

2018年度まで		2019年度以降	
大問Ⅰ	語彙・文法・語法問題	大問Ⅰ	語彙・文法・語法問題 不定詞・関係代名詞・関係副詞・接続詞 ・助動詞・前置詞・動詞の時制や相・仮定法 ・句動詞（連語）・慣用表現
大問Ⅱ	文脈と文法把握のクローズテスト	大問Ⅱ	文脈と文法把握のクローズテスト
大問Ⅲ	会話文（日常会話）	大問Ⅲ	会話文（日常会話）
大問Ⅳ	長文（読解問題と整序問題）	大問Ⅳ	長文（読解問題）
		大問Ⅴ	整序問題（日常会話）

図 20. 入試問題（英語）出題構成

また、2018年度一般入試（後期）の「英語」に出題ミスが起きたことを受けて、「出題ミス・採点ミス防止マニュアル」（2016年度に英語教育センター設置準備室が制定）に、「(5) 報告」の内容を追加し、作問段階での校正作業をより慎重に行うことが入試問題作成委員会企画会議で合意され、ACE運営会議で報告された。

### 2. 2020年度

出題の選択肢数を増やすことを検討し、入試問題作成委員会企画会議でも提案してきた

が、様々な角度から検討した結果、2020年度（2021年度入試）も前年通りの作問構成とすることがACE会議で了承された。

### 3. 今後に向けて

英語の入試問題作問体制やその改革については、2016年度の英語教育センター設置準備室時から2018年度までの2年間で、その大枠の作業は終えている（詳細は『ACE Review 2018』を参照のこと）。今後は、高等学校学習指導要領改訂にともなう入試出題範囲の変更などが考えられる。

## 広報活動

英語教育センター（ACE）が本学における英語教育の拠点としての役割を全うするためには、活動内容を適切に伝えるための広報活動が欠かせない。2019年度・2020年度ともに、フライヤー作成や掲示、ホームページ作成と更新、各種広報媒体への掲載、オープンキャンパス活動など、多方面にわたる広報を行った。

### 1. フライヤー作成・掲示

#### 1.1. 2019年度

例年通り、ACEを紹介するフライヤーを作成し、オリエンテーション期間に新生入生、および在学生・教職員に配布した（図21、A4両面／表面カラー）。

また、年間を通して、各種案内用のフライヤーも作成した。一例をあげると、英検、TOEIC®学内試験、Movie Night、Summer Activity、ハロウィンイベント、クリスマスイベント、e-Learning 学内相談会、e-Learning 表彰式などである。これらは、本学ホームページで案内するとともに、学内に掲示することで、学生への周知をはかった。



図 21. 2019 年度フライヤー（表）

#### 1.2. 2020年度



図 22. 2020 年度フライヤー（表）

2019年度に引き続いて、ACEを紹介するフライヤー（図22、A4両面／表面カラー）を作成し、新生入生と教員、および関係部署に配布した。新型コロナウイルスの感染拡大により、とくに前期の間は活発な宣伝はできなかったが、後期を中心に、英検、TOEIC®学内試験、Summer Activity、e-Learning 表彰式などのフライヤーを作成した。これらのフライヤーは、本学ホームページで案内するとともに、学内に掲示し、学生への周知をはかった。

## 2. ホームページ・各種広報媒体への掲載

### 2.1. 2019 年度

本学ホームページにおいて、「新着情報」「センター長メッセージ」「英語教育センターのご案内」「センター教員」「英語教育センターの役割」「利用案内」「e-Learning について」「資格・検定試験について」「ACE REVIEW (年次レポート)」「Blog SPEAK EASY」の 10 コンテンツを運営し、英語情報の提供と ACE の宣伝に努めた。とくに「新着情報」では、ACE プログラムやイベント、講座についての案内や報告を速やかに掲載し、学生の関心を高めることを心がけた (図 23)。



図 23. ホームページ

また、2018 年度から始めたアラオ教員によるブログ“SPEAK EASY”においては、2019 年度は合計 7 本の記事を公開し (図 24)、英文の解説やイベントの報告などを行った。

なお、紙媒体の広報としては、本学の『大学案内』に ACE の特集を組み、ACE の紹介、およびセンター長と利用者のメッセージを掲載した (全 2 頁)。そのほか、オープンキャンパス DM やリーフレット、学生ハンドブックなどにおいても ACE の広報に努めた。



図 24. キャンパスブログ (ホームページ)

## 2.2. 2020 年度

2019 年度に引き続き、ACE の案内と、英語学習への意欲を高めるような情報を提供することを心がけた。前期は、新型コロナウイルスの感染拡大のため、学生を大学へ誘導するような広報は控えざるを得なかったが、後期からは、「新着情報」の更新に努め、ACE プログラムやイベント、講座についての案内や報告を掲載した。

2020 年度のホームページ活動として特筆すべき点は、新しい試みとして「EXTENSIVE READING」を立ち上げたことである。本学が所蔵する多読用書籍の紹介と、重要な英語表現を解説するという趣旨である（図 25）。2020 年 10 月公開の第 1 号以来、順調に版を重ねており、既に 7 号を公開済みである（2020 年 2 月現在）。



図 25. EXTENSIVE READING

紙媒体の広報としては、本学の『大学案内』に ACE の特集を組み、ACE の紹介と、センター長および利用者のメッセージを掲載した（全 1 頁）。そのほか、オープンキャンパス DM やリーフレット、学生ハンドブックなどにおいても ACE の広報に努めた。

## 3. オープンキャンパス

### 3.1. 2019 年度

例年通り、相談ブースを志学館 1F に設置し、アラオ教員（ACE センター教員）による模擬授業を志学館 5 階のセミナー室で実施した。同様に、スタンプラリーのスポットとして志学館 5 階の English Café を提供した。また、OC 期間中は、本学学生に模擬授業とブース活動のサポートを依頼した。

本年度の新しい試みとしては、まず、英会話の小企画「ONE MINUTE ENGLISH」が挙げられる。主に相談ブースで行う企画であり、第 2 回からは、講座「What's ICT? (AI ROBOT)」「英検・TOEIC のおすすめ」をくわえることで、多様なコンテンツを提供することができた。また、ブースとセミナー室においては、ACE のプロモーションビデオをプロジェクターで投影し、ACE の雰囲気をも具体的に伝えるようにした。

2019 年度の参加者数と主な実施内容は表 30 のとおりである。大学の方針に従い学部・学科・専攻の企画を優先する必要があるため、訪問者の確保には毎年苦慮するところである。それにもかかわらず、今年度は合計 65 名が ACE を訪問した。これは、2018 年度の 52 名を上回る数字である（ただし、2018 年度第 6 回 OC は中止）。企画を練り工夫した努力が実りつつあるとみなしてもよいだろう。



表 30. 2019 年度オープンキャンパス参加者数

	全訪問者数 ( ) 内は保護者の数	主な実施内容
第1回 (5/25)	9名 (10)	< 志学館1F >
第2回 (7/20)	2名 (0)	相談ブース、ONE MINUTE ENGLISH、 AI ROBOT、英検・TOEICのおすすめ
第3回 (7/21)	21名 (11)	
第4回 (8/24)	15名 (5)	< 志学館 5F >
第5回 (8/25)	4名 (3)	模擬授業 (セミナー室)
第6回 (9/29)	14名 (6)	スタンプポイントの提供 (English Café)
合計	65名 (35)	

### 3.2. 2020 年度

新型コロナウイルスの感染拡大により、本学の 2020 年度オープンキャンパスは規模を縮小して開催した。そのため、ACE においても、模擬授業やブース相談は実施できなかった。他方で、入試広報課と相談のうえ、各学科・専攻志望者が集う説明会の教室において、アラオ教員が作成した ACE のプロモーションビデオを流した。また、本学ホームページで行われた WebOC にも参加し、アラオ教員が作成した動画を 2 本配信した (図 26)。



図 26. WebOC 用のビデオ

### 4. その他

2019 年度は、在学生オリエンテーション・新入生オリエンテーション時にアラオ教員が作成したプロモーションビデオを流し、ACE の説明を行った。また、2020 年度は、新入生のプレイズメントテスト後に、ACE プロモーションビデオを流し、説明を行った。

## 5. 今後に向けて

2020年度は新型コロナウイルスの感染拡大のため、とくに前期は広報活動を自粛せざるを得なかった。しかしながら、2019年度はもちろん、2020年度後期には、多様な活動を行うことができた。

そのなかで有効な媒体についての理解が進んだ。フライヤーは、ACEの認知度を高め、学生の英語への関心を促すために欠かせない媒体である。また『大学案内』におけるACEページは、学外への大きなアピールとなっている。

さらに、本学ホームページを通じた広報活動は、紙媒体のフライヤーとは異なる効果があると考えられる。とくに2020年度は、新企画「EXTENSIVE READING」の開始により、単なるプログラムの広報にとどまらず、英語を学ぶ楽しさをより活発に発信することができたと考えている。

来年度以降は、こうした媒体を適切に活用して、さらに活発な広報活動を行う。

## 執筆者一覧

Arnold F. Arao	英語教育センター 特任講師
Beh Siewkee	教育学部教育学科 講師
荒川 亜希	英語教育センター 職員
今井 澄子	文学部歴史文化学科 教授
小倉 雅明	教育学部教育学科 講師
小山 敏子	教育学部教育学科 教授
村尾 敏彦	人間社会学部人間社会学科 教授
森本 正太郎	薬学部薬学科 教授

(五十音順)

---

## ACE REVIEW 2020

2021 年（令和 3 年）3 月 31 日発行

編集発行            大阪大谷大学 英語教育センター（ACE）  
〒584-8540 大阪府富田林市錦織北 3 丁目 11-1  
TEL (0721)24-0596

印    刷            協和印刷株式会社  
〒615-0052 京都市右京区西院清水町 13  
TEL (075)312-4010

---

A digital version of this publication is available for download at  
[www.osaka-ohtani.ac.jp/facilities/ace/review.html](http://www.osaka-ohtani.ac.jp/facilities/ace/review.html)



# IN THIS ISSUE

- はじめにー現状と今後
- 共通教育科目「英語IA/IB」「英語IIA/IIB」
  - ・ 共通シラバス
  - ・ 習熟度別クラスの設置
  - ・ プレイACEMENTテストとアチーブメントテスト
- ACE PROGRAM
- 学習支援
  - ・ e-Learningプログラム
  - ・ 検定試験
  - ・ ACE事務局
- 入試作問改革
- 広報活動

Email: [eikyou-center@osaka-ohtani.ac.jp](mailto:eikyou-center@osaka-ohtani.ac.jp)

Tel: 0721-24-0596

HP: <https://www.osaka-ohtani.ac.jp/facilities/ace/>